働くことの不安定化とキャリア教育実践

児　島　功　和

1. はじめに

本論では、大学におけるキャリア教育授業の報告を行ないたい。取り上げるのは、2016年度前期（4月から7月）に山梨学院大学の経営情報学部2年生以上の学生（履修登録者数25名、そのうち授業放棄2名）を対象とした「キャリア・デザインⅠ」という授業である。授業報告という性質上、授業担当者である筆者が授業設計や運営にあたってどう考えたのかという主観も記述することになる。

本論の構成は次のとおりである。次の2節では、そもそもキャリア教育とは何かについて政策文脈を中心に整理する。3節では、キャリア教育を行なううえで前提となる社会経済状況について概観する。4節では「キャリア・デザインⅠ」の授業内容について、5節ではこの授業の運営方法について整理する。最終節となる6節では、これまでの議論を振り返るとともに、今後修正する必要があると考えている課題について言及する。5節と6節では、学生が書いた手書きの文章を筆者がPCで打ち直した文章（誤字・脱字の修正は行なわなかった）を掲載する。学生の書いた文章を本論に掲載するにあたっては、15回目の最後の授業で学生に成績評価にも全く関係しないことを含めて説明し、研究に協力できない場合のみ自分の名前をサインしてもらった。協力できないと申し出た学生が1名おり、その学生の文章は掲載しないこととする。

2. キャリア教育とは何か

日本においてキャリア教育という言葉が使用されるようになったのは、2000年前後のことである[(1)]。政策文書の中で「キャリア教育」が出てきたのは、1999年12月の中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」答申が初めてとなる。その後、2003年4月に「若者自立・挑戦戦略会議」が設置され、そこから2003年6月に「若者自立・挑戦プラン」が発表される。これを機に、キャリア教育推進の動きが本格化することになる。大学に特化したものでは、文部科学省が「大学生の就業力育成支援事業」「産業界ニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」といった大学改革を特定方向に誘導することを企図した補助金事業があげられる。加えて、制度としての大学の在り方を規定する大学設置基準も改正され、2011年度よりキャリア教育が大学教育として正式に位置づくことになった。

キャリア教育をめぐる動向については、先行研究において1990年代後半以降の「若年雇用が問題化→日本経済や社会の将来への不安材料→若者をテコ入れする必要性→キャリア教育」（児美川、2013：40頁）と整理されている。すなわち、労働を中心とする社会経済状況が不安定化し、そうした不安定な社会をわたっていける力をつけよう、というわけである。そしてその力をつけるのが、学校（大学を含む）におけるキャリア教育というわけだ。

社会経済状況の不安定さは自然現象ではな

い。政策によってその不安定さを抑制し、変化させることができるものである。そうである以上、そうした不安定な社会経済状況を所与のものとし、生徒・学生に不安定性に耐え、そうした社会を渡っていける力をつけさせようとすることは大きな問題があるといえる。どれほど若者が就業意欲を高め、例えば国家資格を取得し、主体的に何事にも取り組む資質を持っていたとしても、安定した仕事自体がなければ、仕事に就くことすらそもそも出来ない。ともかく、2011 年度以降、大学でキャリア教育を行なうことが公的に求められるようになった。

大学でキャリア教育を実施するとして具体的に何をすればよいのか。キャリア教育の本質的な難しさとは、そもそも何をすることが生徒・学生のキャリア形成に資するのかが明確ではないことにある。「社会人基礎力」という概念を例に取ろう。「社会人基礎力」は 2006 年より経済通産省が提唱・推進しているもので、同省ウェブサイト（http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html）（2017 年 2 月 23 日アクセス）によると「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされる。具体的には、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の 3 つの能力（12 の能力要素）から構成されている。同省は、社会人基礎力グランプリという賞コンテストを毎年実施しており、大学の授業を通じて「社会人基礎力」を高めたとされる取り組みが表彰されている。このような「社会人基礎力」を高めることをキャリア教育の目標とすることも可能であろう。しかしながら、「社会人基礎力」とされる能力がそれぞれの大学の学生にとってどういった意味を持つのかという検討が必要であり [2]、また「社会人基礎力」を教育目標として設定したとして、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を授業で学生につけさせるには、具体的に何をどのようにすればよいのか、更に別の検討が必要となるはずだ。狭義の職業教育とキャリア教育の違いは、特定の業界における特定の仕事に就くことを教育目標として設定できるか否かにある。すなわち、キャリア教育には、生徒・学生がどの仕事に就くのかという目標が不明確であるにも関わらず、かれらのキャリア形成に資する授業計画を練らねばならないという困難があるのだ。

このように、大学でのキャリア教育が義務化されたものの、実際にどう授業を設計すればいいのか明確な答えがあるわけではない。しかし、そうであったとしても、キャリア教育授業を担当することになった教員は授業を行なわなければならない。

3. 授業の前提となる「働くこと」の不安定化

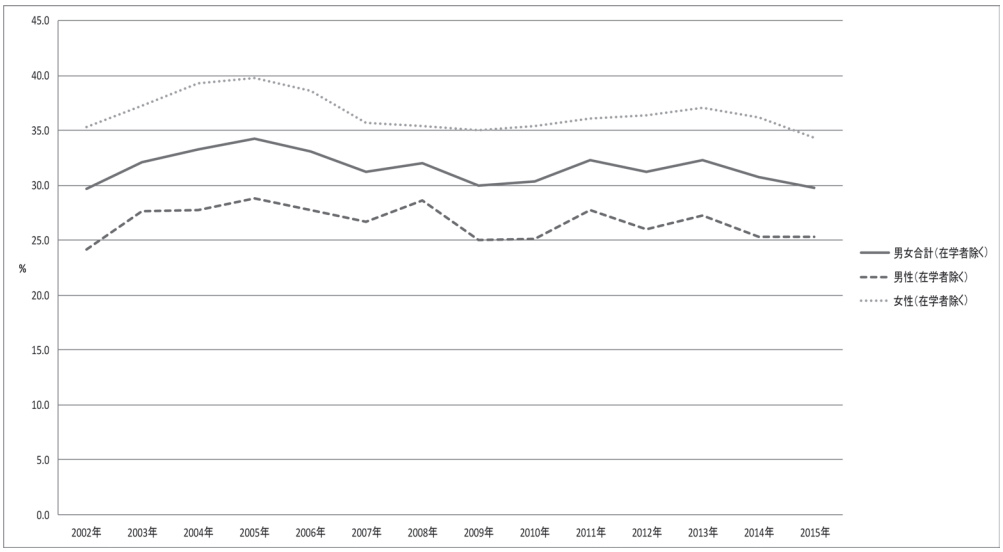
筆者は、現在の勤務校を含めて三つの大学でキャリア教育授業を担当してきた。科目名では、「キャリアデザインⅠ」「キャリア形成論」「ライフコース論」「社会の多様な働き方」「現代社会を支える企業」「キャリア・デザインⅠ」となる。担当してきた授業でも一部例外はあるものの、キャリア教育授業では現代日本の労働および関連状況を取り上げるようにしてきた [3]。

1990 年代後半以降、若者が学校を出て労働の世界に入っていく道筋は急速に不安定化し、今や不安定であることが常態化している [4]。図 1 は 2002 年から 2015 年にかけての 15 歳から 24 歳までの若者（在学者を除く）の非正規雇用割合推移である。女性は男性よりも 10 ポイント高く、15 歳から 24 歳の働く女性のうち 35% が非正規雇用となっている。男女合計でも 30%、若年労働者のうちおよそ 3.3 人に 1 人が非正規雇用という大変に厳しい状況となっている。

関連して、都道府県別のワーキングプア

（working-poor）率はどうであろうか（戸室、2013）。戸室は、ワーキングプア率を「世帯の主な収入が就業所得で成り立っている世帯（就業世帯）のうち、所得水準が最低生活費以下の世帯（貧困就業世帯）の割合」（戸室、2013：50 頁）としている。この規定の詳細について

図 1　若年（15 ～ 24 歳）非正規雇用者割合の推移



（出典：総務省統計局「労働力調査長期時系列データ」より筆者作成）

表 1　都道府県のワーキングプア率の推移

	全国	沖縄	鹿児島	宮崎	大分	熊本	長崎	佐賀	福岡	高知	愛媛	香川	徳島	山口	広島	岡山
2007 年	6.7%	20.5%	8.6%	9.2%	8.0%	8.2%	9.8%	6.4%	8.2%	10.9%	8.5%	6.3%	7.9%	5.7%	6.9%	5.8%
2002 年	6.9%	21.0%	10.1%	9.7%	7.5%	9.2%	8.1%	6.9%	8.2%	10.1%	8.4%	6.1%	8.4%	6.2%	6.6%	6.0%
1997 年	4.2%	18.6%	7.9%	6.6%	6.2%	8.0%	4.7%	3.7%	6.2%	6.0%	5.7%	3.4%	5.4%	4.5%	4.2%	3.9%
1992 年	4.0%	20.2%	10.3%	7.5%	8.4%	6.7%	8.7%	3.9%	5.4%	7.2%	7.5%	2.9%	7.3%	4.0%	3.4%	3.8%
2007 年 −1992 年	2.8	0.3	-1.7	1.7	-0.3	1.5	1.1	2.5	2.8	3.6	1.0	3.5	0.6	1.7	3.5	2.0

	島根	鳥取	和歌山	奈良	兵庫	大阪	京都	滋賀	三重	愛知	静岡	岐阜	長野	山梨	福井	石川
2007 年	5.2%	7.1%	8.7%	6.4%	8.5%	11.3%	10.7%	4.8%	4.5%	5.4%	4.1%	4.1%	4.3%	5.9%	4.0%	4.8%
2002 年	5.3%	5.2%	9.1%	5.4%	9.4%	12.3%	10.1%	4.5%	4.2%	5.6%	4.5%	4.9%	4.5%	5.5%	4.0%	4.4%
1997 年	2.7%	2.5%	5.9%	3.1%	5.4%	5.8%	6.2%	2.1%	2.9%	3.2%	2.9%	2.6%	2.4%	3.0%	2.1%	2.5%
1992 年	3.1%	4.3%	5.1%	3.4%	4.5%	5.5%	5.8%	1.4%	2.8%	2.5%	2.4%	1.9%	2.7%	1.7%	2.0%	1.7%
2007 年 −1992 年	2.1	2.9	3.7	3.0	4.0	5.8	4.9	3.4	1.7	2.9	1.7	2.2	1.7	4.2	2.0	3.1

	富山	新潟	神奈川	東京	千葉	埼玉	群馬	栃木	茨城	福島	山形	秋田	宮城	岩手	青森	北海道
2007 年	3.6%	4.7%	5.2%	6.2%	5.0%	4.5%	5.4%	4.9%	5.2%	6.2%	5.0%	7.5%	7.2%	6.9%	8.9%	7.9%
2002 年	3.3%	4.7%	5.6%	6.7%	4.3%	5.1%	6.0%	5.0%	4.8%	5.7%	4.0%	6.6%	6.2%	6.3%	8.0%	6.9%
1997 年	1.8%	2.8%	2.8%	4.1%	2.9%	3.0%	4.0%	3.2%	2.9%	2.5%	1.8%	2.5%	3.2%	3.8%	5.4%	4.5%
1992 年	0.5%	2.6%	2.3%	3.2%	2.9%	2.6%	4.0%	3.3%	2.4%	4.2%	1.9%	2.9%	3.4%	4.2%	7.0%	4.5%
2007 年 −1992 年	3.1	2.0	2.9	3.0	2.1	1.9	1.4	1.5	2.8	2	3.1	4.6	3.7	2.7	2.0	3.4

（出典：戸室健作「近年における都道府県別貧困率の推移について：ワーキングプアを中心に」51 頁の図を筆者が若干修正）

は戸室の論考を参照していただくとして、表1を見ていただきたい。網掛けがなされている箇所は全国のワーキングプア率よりも数値が高いところで、下線がひいてあるのは1992年から2007年の上昇幅が全国平均割合よりも高いところになる。全国的にワーキングプア率が上昇していることがわかる。勤務校のある山梨県を見ると、1992年のワーキングプア率は1.7%だったが2007年には5.9%と4.2ポイントも上昇している。働いているにも関わらず貧しい状況に陥る方々が増えている、ということになる[(5)]。

筆者はキャリア教育授業を設計するうえで、こうした不安定な社会経済状況に正面から向き合う必要があると考えている。もっとも、正面からの向き合い方には二つあるだろう。一つは、学生が良質かつ安定した労働条件の企業等に正社員・正職員として就職し、それからずっと安定的に働きつづけられるような力をつけることを目指す、キャリア教育がありえよう。そうした教育がどの程度可能かはわからないが、ともかくこうした考え方は学生の努力次第で正規雇用に就くことができ、そのまま働きつづけられることを前提としている。しかし、安定した就業生活を送ることができるか否かは景気変動や労働政策、社会保障政策等の影響を強く受ける以上、必ずしも上手くいくとは限らない。そうしたキャリア教育授業で「A」評価の学生が非正規雇用に就く可能性、あるいは就職した先がいわゆるブラック企業だったという可能性は当然のことながらゼロではない。

そうであれば、授業において就職活動（就活）においてどうすれば安定的でよい就職先を見つけられるかを扱うだけではなく、非正規雇用として働く可能性やブラック企業で働くことになる可能性を想定するキャリア教育があってもよいのではないだろうか。そのキャリア教育は、学生が非正規雇用として働くこと、ブラック企業で働くようになることを目指して行なうわけではない。あくまでそうした可能性を想定し、そうした現実が広がっていることを直視したうえで、学生に働くことをめぐる厳しい状況について正確な現実認識を持ってもらうことを目指したキャリア教育授業ということである。「キャリア・デザインⅠ」はこのような考えを基に授業設計を行なった。

4. 授業内容

上記の考えを具体化するために何をテーマとして取り上げればよいのか悩んだ結果、サービス残業、就活、フリーター、ブラック企業、ブラックバイト、ワークライフバランス、労働組合、最低賃金、ホームレス等を「キャリア・デザインⅠ」で取り上げることにした。どのテーマもキャリアを考えるうえで現在問題とされていることであり、かつ、学生が「自分事」として関心を持ってくれるテーマだと思われた。

現在日本社会において問題とされていることであり、同時に学生が「自分事」として関心を持ちやすいということは、授業設計をするうえで強く意識した。前者だけであれば、いかに工夫された授業であったとしても、学生が自らの生き方や将来見通しを真剣に考えるようになることには繋がらないと思われたからである。キャリアの授業である以上、学生がいかに生きるべきかと問うことに繋がるべきである。かねてから「知識は自分たちの社会を深く知るためのよき道具であり、いかに生きるべきかと問いなおしを可能にしてくれるよき道具だと思ってほしい」と考えていたこともあり、上述したテーマを選択した。

「キャリア・デザインⅠ」のシラバスでは、到達目標、授業内容、授業計画を次のように書いた。

【到達目標】

第一の目的は、現代社会の労働に関する基本的知識を獲得することです。第二の目的は、なぜ労働がこのような状況にあるのかを批判的に考察できるようになることです。

【授業内容】

現代社会において働くことは不安定化しています。働くことの不安定さは「5 年後、10 年後、それより先に私たちはどのようになっているのか」という見通しを立てることを難しくしています。本授業では、不安定化する社会を“したたか”に生きていくために必要とされる知識を学ぶだけではなく、安心して暮らせる社会をどうすればつくっていけるのかを探求していきます。

本授業は、たくさん読み、たくさん書き、たくさん考えることを受講生に求めます。講義を受け身で聞いているだけでは身にならないからです。たくさんのことをしなければいけない授業ですが、最後まできちんとついてくれば、卒業後社会人になるうえで必要な基本的準備はできるようになると考えています。第 1 回目の授業には必ず出席してください。評価方法や授業に関するルールの詳細を説明します。

【授業計画】

第 1 回：オリエンテーション
第 2 回：なぜサービス残業をするのか
第 3 回：ブラック企業とはなにか
第 4 回：なぜフリーターになるのか
第 5 回：ミニレポート執筆とふりかえり
第 6 回：ブラックバイトとはなにか
第 7 回：「就活」とはなにか
第 8 回：労働とジェンダー
第 9 回：ミニレポート執筆とふりかえり
第 10 回：理不尽な働き方を変えるにはどうすればよいか
第 11 回：安心して暮らせる給料はどれくらいか
第 12 回：どうしてホームレスになるのか
第 13 回：ミニレポート執筆とふりかえり
第 14 回：まとめ
第 15 回：最終レポート執筆とふりかえり

まず到達目標については、現代社会の労働に関する基本的知識を獲得すること、労働をめぐる現状を批判的に捉えられるようになることの二つを置いた。授業計画については、テーマをどのように配置するのか非常に悩み、このように配置したものの、これが絶対的によいとは考えていない。例えば「ブラック企業とはなにか」のすぐ後に「理不尽な働き方を変えるにはどうすればよいか」でもテーマ自体の連続性はある。実際僅かではあるが、学生の反応を見て、テーマの順番を入れ替えたこともあった。加えて、毎回のテーマについては「問い」の形式で書くことにした。ただ「フリーター」と書くより、「なぜフリーターになるのか」と書くことで学生が「そういえばなぜだろう」と興味を覚えてくれるのではないかと考えたためである。また、問いを書いておくことで、その答えを知ることになる授業であることが学生にとってわかりやすいはずとの思いもあった。あわせて、問いをシラバスに書き込むことでその日筆者が教師として何をするべきかという〈制約＝枠組み〉となることも意識した[(6)]。

いずれにせよ、このようなテーマ配置を計画したのは、緩やかにでもテーマとテーマが連結していることを重視した結果である。前半部分で現代日本の労働状況について概観し、徐々にそれを批判的に見ることができるようなテーマを扱うようにし、加えて労働に深くかかわる周辺テーマに移行していくようにした。「ホームレスはキャリアの授業に相応しくないテーマ」

と考える方がいるかもしれないが、正社員・正職員とホームレス状態にある方々との間につながりがないと言えるだろうか。正社員・正職員であったとしても大病を患ったらどうなるであろうか、いわゆるブラック企業に勤めることになり心身を病み、退職を余儀なくされた場合はどうであろう。ホームレス状態にある方々について考えることは、日本社会における労働がいかに危うい地盤の上に立っているのかを考えるうえで重要であると思われた。なお、授業開始後数回は、学生が興味を抱きそうなテーマを配置した。「この授業で扱うことは面白そうだ」と感じてもらうことが、授業に“勢い”をつけるために大切と考えたためである。

また、「ブラックバイトとはなにか」「理不尽な働き方を変えるにはどうすればよいか」「安心して暮らせる給料はどれくらいか」「どうしてホームレスになるのか」の回では、働くことをめぐる厳しい状況をどう変えうるのか、実際に状況を変えようとする動きにはどのようなものがあるのか、あるいは困窮状態に陥ったときに何処にいけば支援を受けられるのかを扱った。「理不尽な働き方を変えるにはどうすればよいか」回では、いわゆる「労働法」と労働組合を取り上げた。具体的には、労働三権（①団結権②団体交渉権③団体行動権）に保障される形で労働組合が存在し、労働者が団結することで労働条件改善のために使用者と交渉しうること、実際にどのように労働組合が活動しているのかという事例を紹介した。労働法については、学生に次のようなクイズも出した（参考にしたのは厚生労働省が作成した「これってあり？～まんが知って役立つ労働法 Q&A ～」（http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/mangaroudouhou/）（2017年2月23日アクセス）というウェブサイトである）

・労働法クイズ（○か×で答えてください）

Q1：労働基準法に書いてあることに違反する労働契約は無効である（　　）
Q2：解雇の予告は30日前におこなわなければならない（　　）
Q3：労働者は「辞めます」と言ったら遅くても2週間後には辞められる（　　）
Q4：「気に入らない」は解雇の理由になる（　　）
Q5：経営不振に陥ったら誰でも解雇してかまわない（　　）
Q6：体に障るのはセクハラであるが、言葉で性的な冗談を言うのは、いくら相手が嫌がっていてもセクハラではない（　　）
Q7：労働基準法違反があったら市役所に行くと解決する（　　）
Q8：10人以上の労働者がいなければ、労働組合をつくることはできない（　　）
Q9：労災かどうかは労働基準監督署長が決める（　　）
Q10：賃金は、通貨で、直接労働者に、その全額を支払わなければならない（　　）
☞「これってあり？～まんが知って役立つ労働法 Q&A ～」を検索してみよう！スマホ版をダウンロードしよう

「ブラックバイトとはなにか」の回では、学生にアルバイト先の様子について聞いたところ（アルバイトをしていて面白いと感じるところや変だなと思うところを教えてください」）、次のような意見を書いてくれた。そこには、働くことの面白さとともに、アルバイト先への怒りが表明されていた。

どの商品が売れるか知ることができる／お客さんの笑顔が見られる。嫌なのは客のクレーム／暴力・暴言、無給の出勤時30分間洗浄／料理を作るのが好きでおいしいといわれると嬉しい／部活のような感覚／タ

図２　相談場所

	機関名（分野）	住所／連絡先
公的機関	福祉事務所（貧困、障がいなど）	
	保健所（子ども、精神障がいなど）	
	労働基準監督署（労働問題）	
	子ども家庭支援センター（子ども、子育て）	
	児童相談所（子ども）	
	女性センター（女性）	
	医療機関（病気、障がい、依存症など）	
	地域包括支援センター（高齢）	

（資料出所：「貧困問題マニュアル」http://www.npomoyai.or.jp/wp-content/uploads/2015/04/hinkonlec.pdf より引用）

イムカードを着替えてからきって、仕事が終わった時には着替える前にきることはおかしい／仕事内容が正社員と一緒／お客さんが買ってくれるような棚を作るのがとても大切／職場はみんな年上で優しくていい人たちばかり

「どうしてホームレスになるのか」回では、困窮状況に陥ったときに相談できる場所を調べて書き込んでみるよう促すこともあった（図２）。いずれにしてもこれらの回では、働くことをめぐる厳しい状況をどう変えうるのか、実際に状況を変えようとする動きにはどのようなものがあるか、困窮状態に陥ったときに何処にいけば支援を受けられるのかを取り上げ、学生が厳しい労働状況を知ることでただ無力感に囚われないように気をつけた。

5. 授業の展開と運営方法

5-1. 通常授業の中の展開

5 回目と 9 回目、13 回目の当日提出ミニレポートを執筆した回、および全体のまとめを行なった 14 回目と 15 回目以外の、通常授業（90 分授業）は表 2 のような構成で行なった。

まず、筆者が用意したワークシート（A3 の表面のみ使用）を配布した。ワークシートには、学科・学籍番号・名前を書く欄があり、それに加えて①準備学習（以下に書いてほしいもの：記事タイトル、記事内容の簡単なまとめ、その他等と記載）、②（問いを受けた）構想･回答、③本日の授業内容のまとめ（感想ではなく、内容を中学生でも理解できるようにまとめること）、④感想･質問等の 4 つを書く欄を設けた。

授業開始時間が来ると、まずワークシートを配布する。すると、学生は学科・学籍番号・名前を書きだし、続いて、①の欄に自分が探してきた労働に関するニュース記事のまとめを書きだす。これは初回の授業で、基本的に毎回労働に関するニュースを何でもいいので記録し、授業に持参するよう指示していたためである。また、ニュースを定期的に確認する習慣をつけるという目的もあった。授業日前に準備してくる学生もいたが、授業直前の昼休みをまるまる使ってニュースを調べている学生も少なくないようだった。この準備学習（予習）を必須としていたため、筆者が授業開始時間 10 分前に教室に入ると、既に多くの学生が黙々とニュースを調べていた。授業開始後 10 分が経過するとほとんどの学生がニュースを①の欄に書き終えている。そこで筆者が、「○○さん、どんなニュースがありましたか」と聞き、簡単な質疑応答をしているうちにいつも 20 分ほどが経過していた。大体 3～5 名ほどと質疑応答を行なった。

表２「キャリア・デザインⅠ」の授業構成

時間配分	学生の活動	教師（児島）の活動
0～20 分	・①準備学習（予習）してきたものをワークシートに記載	・前週のワークシートを返却 ・ワークシートを配布し、準備学習（予習）してきたものをワークシートに書くよう指示 ・机間巡視 ・学生と質疑応答（ホワイトボードに書きながら）
20～40 分	・【情報収集】教師からの問いを受けて、スマホや書籍、周りの学生と話しながら「②構想・答え」をワークシートに記入	・本日のテーマに関連した問いを発表 ・机間巡視 ・学生と質疑応答（ホワイトボードに書きながら）
40～75 分	・学生、ワークシートにメモをとる	・資料を配布し、問いに関する説明を行なう
75～90 分	・教師の説明を受けて、ワークシートに「③授業内容のまとめ」を書き、あわせて「④感想・疑問」を書き、教師に提出	・机間巡視 ・ワークシートを受け取る

ニュースに関する質疑応答が一段落すると、筆者が「これが今日の問いです」と言い、ホワイトボードに2～4つの問いを書く。例えば4回目「なぜフリーターになるのか」では、【1】フリーターとはなにか【2】なぜ非正規雇用は増えたのか（要因）【3】フリーター、また非正規雇用で働き続けて何が困るのか、という問いを出した。すると、学生はそれを受けてスマートフォン（スマホ）で調べだす、あるいは自分ひとりで考えたり、近くの人と話すことでこの問いの回答を探した。回によっては、筆者が大量の労働に関する書籍を教室に持ち込み、学生たちに必要になれば回し読みすることを推奨した。筆者はこの時間を「情報収集」の時間と位置づけ、学生のスマホ利用を認めていた。通常の授業であれば、「スマホはしまいなさい」と禁止されることも多いと思われるが、スマホを学習をより豊かにするための教具と位置づけなおし、積極的な利用を奨めた。そして学生が調べたことを②の欄に書き込み終わるまでに10分間ほど経ち、落ち着いた頃に、筆者が「さっきの問いに対する答えはどうだった」と聞き、学生が答えると、それをホワイトボードに書き、質疑応答に移った。ほぼ毎回これを繰り返した。学生同士の回答が異なれば、「これは違うけれどどうしてかな」とまた別の学生に聞くこともあった。学生の意見が何種類か出たところで、初めてその日のテーマと問いに関わる資料を配布した。資料はA3両面２～４枚で、図表等が載った資料も定期的に配布していた。

そして、配布したテーマと問いに関わる資料をもとに、説明を30～35分ほど行なった。90分間の授業のうち筆者が連続して話すのはこの時間帯だけである。いわゆる伝統的な講義形式の時間帯になるものの、その前段階で問いについて学生が調べていること、また筆者の説明を受けて②の自説を修正したうえで③の欄にまとめてワークシートに書く必要もあることから、学生の集中力が切れている印象はなかった（もちろん昼休み直後ということもあってか眠そうな学生もいた）。そして筆者の説明時間が終わると、学生は一斉に②の自説を修正するとともに筆者の説明内容をまとめ、同時にその日の授業に対する感想や質問を書き込んだ。そして、①～④まで書き終えた順番に筆者にワークシートを提出し、授業終了となる。これでほぼ90

分ぴったりとなる。

「キャリア・デザインⅠ」の授業構成には参考にしている方式がある。宇田（2005）の提唱する BRD 方式である。BRD 方式の BRD とは Brief Report of the Day のことであり、当日レポート方式のことを指す。端的には、授業時間を学生がレポートを書く時間と見立てた授業方式、ということである。宇田は表 3 のように授業時間を区分する。表 2 と比較したとき、いかに「キャリア・デザインⅠ」が BRD 方式から多くを学んでいるかわかるであろう。しかし、「キャリア・デザインⅠ」は、BRD 方式に対して若干の変更を加えている。まず､準備学習（予習）の時間を確保していること、宇田では 45 分与えられている「情報収集」の時間（教師の説明が主）を、「キャリア・デザインⅠ」では 30～35 分ほどに短くしていることである。これは経験的なものであるが、少なくない学生は教師が 45 分間説明し続けることに対して集中力が持続していないとの印象を持っている。そのため、説明時間を 30～35 分に短縮した。そのぶん扱う情報量は減少するが、取り上げるものを厳選すればよいと考えるに至った。宇田は自身の在籍する大学のウェブサイトにて、BRD 方式について次のように書いている。「BRD 方式では、授業のテーマに関して、学生にまず考えてもらいます。教員が一方的に教えてしまうことを避けているのです。いわば授業内に『予習』が組み込まれ、この過程で、自分に欠けている知識が自覚され、学ぶ意欲が生じます。このため、講義に対する集中度は、大幅に向上します。」（http://www.nanzan-u.ac.jp/Topics/BUL-149/b149-08.html）（2017 年 2 月 23 日アクセス）宇田の指摘する点についてはこの授業にも概ね該当すると考えている。

まとめると、「キャリア・デザインⅠ」の通常授業の要点は、授業を教師が説明する時間としてではなく、学生が問い、調べ、考え、書くことをする時間であると“見立て”を変更することにある、といえよう。

5-2. 授業全体の展開

授業全体を通じて重視したのは、学生の「書き直し」である。上述したように、筆者は当日提出ミニレポート執筆日を 5 回目、9 回目、13 回目に設定した。例えば授業 5 回目のミニレポート執筆日であれば、2～4 回目の授業で取り上げたことについて学生がどれほど理解しているのかを確認した。加えて、竹信三恵子『しあわせに働ける社会へ』（岩波ジュニア新書）を教科書指定していたので、5 回目ミニレポート執筆時であれば、「教科書の第 1 章の内容を 1～2 ツイート（140～280 字）程度の字数でまとめてください」という問題文も出し、学生が同書の内容をまとめられる程度には理解しているかを確認した（教科書は持ち込み可）。9 回目

表 3　BRD 方式

段階	学生の学習活動	教師の指導
1 確認（5 分）	今日のテーマを確かめる	テーマを板書する
2 構想（20 分）	教科書などを参照して考える	机間巡視する
3 情報収集(45分)	他の学生の構想を知る 教師の説明を聞く	ポイントを説明する。発問、指名など
4 執筆（20 分）	疑問点は質問する レポートを完成し、提出する	机間巡視する レポートを受理する

（出典：宇田光『大学講義の改革：BRD（当日レポート方式）の提案』の 32 頁掲載の図より引用）

には同書の２章、13 回目には同書３章について同じ問題文を出した。

さて、ミニレポート執筆時の学生の回答が正解の時は正解を表わすスタンプ（うさぎが「みました」と書いてある看板を掲げた形）を押し、不正解の時は不正解を表わすスタンプ（怒ったクマの形）を押し、必要に応じて一言から二言程度のコメントをつけて翌週返却した。しかし、これで終わりとはしなかった。不正解だった問題について翌週修正したうえで提出し、それが正解であれば修正点を与える、としたのである。それにより、「わからなかった」→「もういいや」で終わらせるのではなく、「わからなかった」→「何が間違いだったのか確認し、修正しよう」という気持ちにさせようと考えたためである。もちろんミニレポートを返却し、翌週修正して再提出するまでに授業で配布したレジュメを読みなおすことが可能であり、関連書籍を読むことも可能である。そして、それに基づいて間違えた問題を修正し、再提出できる。厳密には、修正してきたことで学生が正しく理解しているかはわからない。だが、筆者はそれでもよいと考えた。なぜなら、間違えてわからないままにしておくのではなく、レジュメを読みなおし、関連書籍を読むという再度の勉強はしているからである。きちんと勉強をしてこなかった学生のほうがきちんと勉強をしてきた学生よりも不正解になる可能性が高いと想定できる以上、書き直しは相対的に勉強をしてこないような学生にとってこそ有効に働いたのではないかと推測する。

次に、ある学生の修正前と修正後の回答を見てみよう。

【問題文】

非正規雇用と正規雇用の違いを説明し、そのうえでなぜ 1990 年代後半以降非正規雇用が増加したのか説明してください。

【修正前】

非正規雇用は正規とは違い、働く期間を契約して決められる。いつでもクビが切れる。正規の半分の賃金で雇うことが可能。「バブル景気」という好景気が一気に破たんしたから。費用を削る面で、企業側が目を付けたのは人件費だったから。

【修正後】

正規雇用とは無期雇用（雇用契約の期間をあらかじめ定めておかない）、直接雇用（間接労働である派遣労働ではない）、フルタイム雇用（職場で定められた標準的な労働時間の勤務を行なう）の条件がある。それに対して非正規雇用とは、上記の条件を一つでも満たさない働き方。1990 年代後半以降に非正規雇用が増加したわけは、社会経済がいつ崩れるかわからないため、企業側はいつでも人材カットができるようにしておくことや、国による規制緩和やサービス産業説なども有力視されていることが原因に挙げられている。

修正後も説明不足な点があり、十分に理解をしたうえで修正したとは言い切れない。例えば、非正規雇用は相対的に低賃金であることが暗黙の前提とされているが、そのことを説明していないために論理に飛躍がある。しかし、語彙は増え、事態をより正確に描写できるようになっていると思われる。単純化すると、修正前よりも説明に説得力が生まれている。

他の回答も見てみよう。

【問題文】

ブラックバイトの特徴を説明してください。また、学生はなぜブラックバイトにのめりこんでしまうのでしょうか、説明して

ください。

【修正前】

ブラックバイトの特徴は無理な労働をさせられたり、しっかりと給料を払ってくれないなど。学生がブラックバイトにのめりこんでしまう原因は、生活していくためのお金がないからです。お金がないから働こう、大変だけど生活するためにがんばらなきゃ、などと思ってしまうからです。

【修正後】

ブラックバイトの特徴は、長時間・深夜勤務や最低賃金以下の給料、残業代不払い、シフトの強要、罰金やノルマがあるなどがあります。ブラックバイトの背景には、仕送りの減少や奨学金受給割合の高さなどから、アルバイトを必死でしなければならない必要性。学生の経済的困窮と商業・サービス業の非正規化雇用依存度の高さや業態の変化（例：24h化）、労働の単純化・定式化・マニュアル化などからアルバイトを中心的戦力として必要とする構造。職場の非正規雇用者への依存度の高まりと非正規雇用の「基幹労働力化（戦力化）」の2つがあります。これらが影響してブラックバイトが増えています。

やはり修正後も説明不足な点は残る。しかし、説明に使用する語彙は増え、十分な理解ではないながらも、修正前よりも修正後のほうが事態をより正確に記述できるようになっている。例えば、修正後の文章では修正前の「生活していくためのお金がないから」がなぜそうなのかを一定説明している。上述したように、修正し再提出することでどれだけ理解が深まったのか正確なところはわからない。だが、書き直しが間違えたところを再度勉強する機会となっていることは確かであろうし、間違えたままであるよりも書き直しをしたことでより理解が深まることも確かであろう。

「キャリア・デザインⅠ」では学生に繰り返し考え、書く機会を設定した。授業時間内の問いに対してまずはスマホ等で調べて自説を書く(①)、次にその問いに対する教師の説明を受けて自説に修正を加えたうえで授業内容をまとめる（②)、そしてミニレポート執筆時に授業時の問いとほぼ同様の問題文が出るためそれに回答する（③)、不正解だった場合は修正して再提出する（④)。ミニレポートで不正解となり修正し再提出した学生は、合計で4度、同じテーマで同じような問いに対して文章を書いていることになる。自分の文章を書き直すということは、自分が何を理解し、何を理解していないかを再確認する作業となる。修正後の学生の文章は、学生がそれでもなお十分な理解に達していない可能性を示唆している。だが、それでも書き直しの機会があったことで理解は前に進んでいると思われる。

6. おわりに

6-1. まとめ

本論では、2016年度前期の「キャリア・デザインⅠ」というキャリア教育授業について詳述してきた。授業内容で重視したのは、現在日本社会で働くことに関して問題とされていることであり、同時に学生が「自分事」として関心を持ちやすい内容を扱うこと、である。2016年現在、若者にキャリア教育をするとき、非正規雇用問題、就活問題、ブラック企業問題、ブラックバイト問題等を取り上げることは、それほど的外れではないはずだ。少なくても学生である若者にとってリアリティのある題材として授業で扱うことができる。キャリア教育は例えば法学や経済学のように体系的な学問的基盤が

あるわけではない。そのことは授業を設計するうえで確固たる軸をつくりづらいことを意味する。しかし、翻ってキャリア教育は学生にとってリアリティを感じる題材を授業に持ち込みやすいともいえる。

授業方法で重視したのは、授業を教師が説明する時間ではなく学生が考え、書き直しをする時間として位置づけること、授業全体を通しても書き直しをする機会を設定すること、である。そして、学生のそうした活動を支えるために、授業中には学生が調べ、考えて書くための時間を保障し、それについて質疑応答を行なった。加えて、学生が書き込んだワークシートやレポートにスタンプを押し、コメントをつけたうえで毎週返却した。授業で教師が取り上げた内容について学生の「わからなかった」→「もういいや」で終わらせるのではなく、書き直しを通じて授業内容に関する理解を深め、自分のキャリアを見直すきっかけにしてほしいと考えたのだ。

6-2. 課題

現時点で感じている「キャリア・デザインⅠ」の課題を三点あげておきたい。第一に、授業時間内の学生同士の情報交換が活発になっていないことで、他者を媒介して理解を深める機会を十分設定できていなかったことがあげられる。筆者が問いを出すと、多くの学生がスマホを用いて問いに関する情報を調べ、調べたことをワークシートに書き込み、そこから筆者との質疑応答が始まる。多くの学生はスマホで調べ、情報交換をするとしても近くに座っている友人とだけ行なっている。しかし、それではなかなか考えが深まっていないと感じている。もっと友人以外の学生と情報交換を行なうことができれば、問いに対する考えがより深くなるのではないだろうか。これはグループワークをどう仕掛けるかということでもあるが、学生が問いに対して理解を深めるためにはどれだけの時間が必要かという時間設定をめぐる問題でもある。

第二に、授業で学生に投げかける問いの“精度”が十分ではなかったと思われることである。スマホで学生が調べることを前提としているため、問いの“精度”が低いと学生はウェブ上ですぐに答え（らしきもの）を見つけてしまい、そこで作業の手を止めてしまっていることがあった。スマホで調べてもすぐに答えを見つけられない問い、しかしながら何を探していいのかわからず“迷子”になる問いは避けること、同時に興味の持てる問いであること、これらを意識して問いの“精度”をあげる必要がある。

第三に、教師（筆者）にとっての負担を軽減するという課題がある。上述したように、筆者が連続して説明する時間は90分のうち30～35分程度しかない。関連して学生に配布する資料に掲載する情報量もそれほど多いものではない。その点での負担は一般的な講義形式の授業よりも軽いと思われる。だが、学生の書き込んだワークシートやミニレポートへのフィードバックを毎週行なっているため、授業外での負担が大きい。教師にとって授業負担を減らすことは継続的によい授業を行なっていくための重要な条件と考える。また、同様の授業運営方法は例えば受講学生100名といった大人数授業では難しいと考えられる。この点については、大いに工夫の余地があろう。

最後に本論を閉じるにあたって、15回目の授業で学生が自身の授業への関わりを振り返った文章を引用したい。引用するのは、15回目授業に出席し、こうした形での研究利用に同意した学生の文章である。なお、学生の文章は次のように筆者が質問を投げかけたことへの応答である。「この授業で学んだ自分をその理由とあわせて評価してください。点数で表してもいいですし、文章でもいいです。」出席確認を兼ねてこのことを聞いたため、学生には自分の名

前を書いてもらっている。筆者は学生に授業に否定的な評価があったとしてもそれを評価に反映させるようなことはしないと伝えたものの、筆者の“視線”を気にして書いた可能性がゼロとは言い切れない。だが、授業への評価ではなく、受講した学生の自分自身への評価としているため、多少なりとも本音が込められていると思われる。

働くということに関して今まで知らないことの方が多くて、社会に出てから知ればいいと思っていた自分がいた。しかし、この授業で少しでも働くことに関する知識を身に付けられてよかったと思う。今後生きていく上で必要な情報だったり、今すぐにでもバイトに使える情報を知れたのでよかった。

評価　良。この授業を受けたことでブラック企業などの特徴や安心して暮らすためなどのこれからの自分に必要なものを学ぶことが出来たと思うし、ミニレポートもそれなりにうまく書けたから評価は良とする。

「働く」ということを多面的に見れるようになったと感じている。授業で扱ったテーマに関連したことがらへの興味がもて、それによってテレビのニュースでも「あーこの話はここと繋がるな」というような見方ができている。考え方の幅が、「キャリア」という点で広がった。ので、自分の評価もA。

B。ある程度は自分の中で理解することができ、収穫もあった所も多いが、過去やった範囲に戻ってみると案外あやふやな部分が多かった。また、最初のテスト以外はキッチリ勉強してテストに望めたと思う。（判読不能）自己採点が難しかったので、中程度という意味でつけた。

この授業はニュースを記入する時間や、しっかり理解する時間といったように全てにおいて時間がもらえていたので、しっかり身に付いた気がした。なので、自分にも高い評価をしてもいいと思った。

評価Ｂ＋。就活するときの大変さや日本と外国の労働の違い、ブラック企業と学んできたが、話をあまり聞いてなかった気がする。今話せと言われてもばくぜんとしか答えられないと思うし、もっとちゃんと聞いておけばよかった。また、テストも直して提出するのをもっとしておけばよかった。

60 点。授業には集中して参加できていたと思いますが、家に帰ってから復習するのではなく、ミニレポートの前日などに復習することが多かったから。

この授業で学んだ自分の評価は 5 点満点中 3.5 点です。理由は、授業に出席するいよくはあったが、昼の時間の授業だったので集中力にかけていた時があったことや、ミニレポートのふく習をあまりしていなくて、もう少しがんばれたのでは？と思うからです。

自分はこの授業に対して良く頑張ったのでは無いかなと思います。自分でまとめたり考えたりする力がまたさらに身に付いたし社会の事に関して人よりかは知識が身に付いた自信があります。正直最初は大変な授業を取ってしまったと思いましたが、授業を重ねるごとに自分の言葉で色々な事が

説明できるようになり、自信になり、この授業を選んで良かったと思いました。これから「就活」を迎える自分にとって、サービス残業、ブラック企業とかの知識を知っている中で「就活」をしていくとなると強みになっていくと思います。またミニレポートでやり直しが2回くらい無かったのが素直にうれしく、この授業は達成感がすごくありました。

90点くらいかなと思う。多分2回休んだと思うけど、1回が大会、1回が体調不良でさぼりはなかったと思う。他の授業だとめんどくさいで休んだり、行くとしても行くかーって感じだけど、これは行こって進んで行けた。今ふりかえってみると、それだけこの授業に興味をもてたのかなって思っている。

まったくの無知ではいってきたけど半年間おそわって全てがわかったつもりはないけど、所々重要な部分が記憶としてのこっているのがよかった。先生がどの話にそれでも話をしてくれたのを聞いてきたので、さんこうになりそう。たんいとはべつにこの授業は他の授業とくらべてしっかりとりくめました。

ブラックバイトやサービス業のことを知り、少しは知識を身につけられたと思います。最初のころは社会のことをまったく理解しておらず、なんの知識もない状態でしたが、この授業を受けて少しは理解を（判別不能）められたと思ったからです。

この授業では労働などについて学び、今まで知らなかったことなどを知り、自分のアルバイトは大丈夫なのかや、これから就職するうえで知っとくべきこと、活かせることが多くよかった。

自分的にもこの授業をとって、非常によかったと思っています。また、この大学3年間の前期までで、ここまでしんけんに取り組め、内容をしっかりはあくできたのは、このキャリアデザインくらいなので、とってよかったと思っています。

社会が厳しい状況になってきていると学べた。理由は、ブラック企業の増加や非正規雇用の増加などグラフなどでくわしく分かったから。

自分は50点くらいです。毎回授業で聞いたことがある言葉が出てきますが、説明しろと言われてもその意味を以外と知らなかったりして、20才なので、さすがにダメだと思ったので。ですが、授業を通して学べた。理解することができ、タメになりました。

これまで自分は就活のことはほとんど考えたりした事がなかったが、この授業で就活というものをよりリアルに感じられるようになったし、今の日本の社会の現状などを知る事ができたと思う。これから社会に出ていくにあたって、必要最低限の知識を学べたと思うので、今のうちに不安な要素を取り除けたのはありがたかった。

授業時間内は集中して取り組めていたと思う。理由は、自分が知らないことの中でもこの授業の内容は役に立つと思ったから。知らずに社会に出た人と知って社会に出た人とでは大きな差があると思う。

60点。授業を休んでしまった。前日の夜レポートをやって、寝不足で全然授業を聞けなかった。

この授業で学んだ自分はそれまで知ろうともしていなかった重要な知識や生き抜く術を身につけたと思っています。毎回レポートを書くことによって、ニュースに関心を持つようにもなったし、社会に対する見方が変わったと思っています。授業を受ける前の自分と明らかに変わったことはたしかです。

A。上記にも書いたとおり、この授業で学んだ事を生かして働きやすいバイト先を見ける事が出来た。多少ではあるが働く場所を見極める力が付いたと思うのでとても満足している。

他の場所では絶対教わらないようなことを知れたと思っている。知っていて損はないようなことを学べたことは自分にとって自信につながるし、ここぞ！という場面でライバルとの差を確実につけられる気がする。これから社会に出ていく立場になるのに役立つ知識を得ることができました。

注

(1) 本節については、児美川（2007）（2013）、および村上（2011）の議論に多くを負っている。特に村上が指摘しているように、「キャリア教育」という言葉がどのような経路依存性のうえに成り立っているのか精査する必要があるが、本論の課題を超えるため行なわなかった。

(2) 例えば、業種・職種によって必要な「社会人基礎力」は違うとも考えられる。大切なのは、その大学を卒業した学生がどういった業種・職種に就いているのかを精査し、そこから大学卒業時までにつけておいたほうがよいと思われる能力とは何かを検討する作業であろう。

(3)「現代社会を支える企業」「社会の多様な働き方」、特に前者はこのコンセプトに該当しない。前者は筆者、ならびに同じようにキャリア教育を担当することになった同僚教員の着任前に既に違う教員によって動いていたこともあり、その流れを引き継ぐ必要があった。具体的には、大学のある地域、および大学に関わりの深い企業で働く企業人をゲスト講師とし、そのゲスト講師が講義をするという内容であった。ただ、筆者と同僚教員の着任を受けて運営方針を大きく変更した。以前はゲスト講師の講義を受けて学生がコメントを書くというスタイルだったが、筆者と同僚教員の着任後はゲスト講師が一定時間講義をした後に「お題」を出し、それについて学生がグループワークを行ない、お題に対して回答を報告する方式に切り替えた。

(4) 日本の状況を把握するうえでは、乾（2010）、宮本編（2015）を参照されたい。

(5) ワーキングプアに関する状況の構造的把握については、後藤（2011）を参照。

(6) 他方、問いに対する回答・説明を明確に想定できないままシラバスに書き込んだ回もあり、授業準備をする段階になって苦労したこともあった。

引用・参考文献

後藤道夫『ワーキングプア原論：大転換と若者』花伝社、2011年

乾彰夫『〈学校から仕事へ〉の移行と若者たち：個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店、2010年

児美川孝一郎『権利としてのキャリア教育』明石書店、2007年

児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』筑摩書房、2013年

宮本みち子編『すべての若者が生きられる未来を：

家族・教育・仕事からの排除に抗して』岩波書店、2015 年
村上純一「今日におけるキャリア教育の高等教育への拡大とその展開：中教審「キャリア教育・職業教育特別部会」における「キャリア教育」という語の意味上の変化に着目して」『東京大学大学院教育学研究科教育行政学論叢』(30)、2011 年
戸室健作「近年における都道府県別貧困率の推移について：ワーキングプアを中心に」『山形大学紀要社会科学』43（2)、2013 年
宇田光『大学講義の改革：BRD（当日レポート方式）の提案』北大路書房、2005 年

《付属資料》授業で配布した資料の中で学生に薦めた書籍やウェブサイト一覧（繰り返し推薦した書籍については 1 回だけ記載）
【第 2 回】
濱口桂一郎『新しい労働社会：雇用システムの再構築へ』岩波書店、2009 年
日野瑛太郎『あ、「やりがい」とかいらないんで、とりあえず残業代ください。』東洋経済新報社、2014 年
今野晴貴『日本の「労働」はなぜ違法がまかり通るのか』講談社、2013 年
森岡孝二『働きすぎの時代』岩波書店、2005 年
森岡孝二『就職とは何か：〈まともな働き方〉の条件』岩波書店、2011 年
【第 3 回】
濱口桂一郎『若者と労働：「入社」の仕組みから解きほぐす』中央公論新社、2013 年
伊原亮司『私たちはどのように働かされるか』こぶし書房、2015 年
今野晴貴『ブラック企業：日本を食いつぶす妖怪』文藝春秋、2012 年
熊沢誠『若者が働くとき：「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房、2006 年
ブラック企業対策プロジェクト（http://bktp.org/）（2017 年 2 月 23 日アクセス）
ブラック企業被害対策弁護団（http://black-taisaku-bengodan.jp/）（2017 年 2 月 23 日アクセス）
【第 4 回】
堀有喜衣編『フリーターに滞留する若者たち』勁草書房、2007 年
乾彰夫『〈学校から仕事へ〉の移行と若者たち：個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店、2010 年
白川一郎『日本のニート・世界のフリーター：欧米の経験に学ぶ』中央公論新社、2005 年
【第 6 回】
大内裕和・今野晴貴『ブラックバイト』堀之内出版、2015 年
【第 7 回】
乾彰夫『若者が働きはじめるとき：仕事、仲間、そして社会』日本図書センター、2012 年
笹山尚人『労働法はぼくらの味方！』岩波書店、2009 年
東海林智『15 歳からの労働組合入門』毎日新聞社、2013 年
【第 8 回】
苅谷剛彦・本田由紀編『大卒就職の社会学：データからみる変化』東京大学出版会、2010 年
児美川孝一郎『若者はなぜ「就職」できなくなったのか？：生き抜くために知っておくべきこと』日本図書センター、2011 年
児美川孝一郎編『これが論点！就職問題』日本図書センター、2012 年
【第 10 回】
門倉貴史『ワーキングプア：いくら働いても報われない時代が来る』宝島社、2006 年
大沢真知子『日本型ワーキングプアの本質：多様性を包み込み活かす社会へ』岩波書店、2010 年
最低賃金を引き上げる会『最低賃金で一か月暮らしてみました。』亜紀書房、2009 年

【第 11 回】
自立生活サポートセンター・もやい『貧困問題レクチャーマニュアル』（http://www.npomoyai.or.jp/download）（2017 年 2 月 23 日アクセス）
湯浅誠『反貧困：「すべり台社会」からの脱出』岩波書店、2008 年

【第 12 回】
内閣府『男女共同参画白書』（http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/）（2017 年 2 月 23 日アクセス）
岩間暁子・大和礼子・田間泰子『問いからはじめる家族社会学：多様化する家族の包摂に向けて』有斐閣、2015 年